

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02732

研究課題名（和文）中等国語科における批判的読解・表現力の形成的評価に関する比較調査研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Formative Assessment of Critical Reading Comprehension and Expression in Secondary Education

研究代表者

間瀬 茂夫（Mase, Shigeo）

広島大学・人間社会科学部研究科（教）・教授

研究者番号：90274274

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現実的な文脈において働く批判的読解力の育成が世界の中等母語教育の課題ととらえ、授業における形成的評価について国際的な比較調査を行うことを計画した。初年次には、国内IB校、米国中西部の高校において授業観察を行った。授業における教師の教授、学習者の実演と即時の評価に特徴が見られた。二年次以降はコロナ禍で文献調査に計画を切り替えた。Goff（2018）では、作品および歴史的な背景に関する資料を読んで書いた批評文について、論証性の観点から評価を行っていた。国内では、批評文のコーパスから学習者自身が読みの方略と書き方を学んで批評文を書き、自己および相互評価を行うところに特徴が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、世界的に母語教育において高次の読解力の育成が求められる中、高校卒業時の総括的評価（修了試験もしくは大学入試）の枠組みをふまえながら、授業における形成的評価のあり方について国際的な比較を行おうとした点に研究的な意義がある。コロナ禍の影響で海外の実地における調査は1年次の米国の高校に限られたが、二年次以降の海外の文献、国内での実地調査を通して、文学の批評文作成における形成的評価の在り方について、米国と日本の共通点と相違点を明らかにした。こうした結果は、思考力・判断力・表現力の育成をより重視する我が国の中等国語科授業の改善において示唆を与えるものとして社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to conduct an international comparative study of formative assessment in the classroom, as we see the development of critical reading skills that work in realistic contexts as a challenge for secondary mother tongue education around the world. In the first year of the study, classroom observations were conducted in IB schools in Japan and in high schools in the Midwest in the United States. Characteristics of teacher teaching, learner demonstration and immediate evaluation in the classroom were observed. After the second year, the plan switched to a literature review in the Corona Disaster; Goff (2018) evaluated critical writing written from reading material about the work and its historical context in terms of argumentation. In the domestic context, the learners themselves learned reading strategies and writing styles from a corpus of critical texts and wrote critical texts, which were characterized by self- and peer-assessment.

研究分野：教科教育学

キーワード：中等国語科教育 批判的読解力 国際比較 国際バカロレア

1. 研究開始当初の背景

PISA ショックに象徴されるように、持続可能な社会を実現するために、学習者に高次の能力を身につけさせることは、世界に共通する教育改革の課題であり、各国の母語教育においては、次のような言語的能力の育成に取り組んでいる。

図や表などを含んだ言語テキストについて、現実的な文脈において正確に読み取ったうえで、その構造や背景の意味を解釈し、主体的に熟考・評価し、表現する能力

…批判的読解・表現力

そうした中で現在、国際バカロレアやイギリスなど、「批判的読解・表現力」の評価の枠組みづくりに成功している国語プログラムと、我が国のようになかなかうまくいかない国語プログラムとの違いが現れてきている。

現在進んでいる教育改革は、全体として見れば、1990年代からはじまる「新学力観」の提唱からはじまり、「生きる力」へと続く、知識・技能の効率的な習得という学習モデルからの転換を図り、本質的な学びを実現するという改革の大きな流れの中にあるものである。

こうした改革について、特に小学校では、「全国学力・学習状況調査」によって成果を測定することで、評価が行われ、改革が進められてきた。一方、中等教育においては、入試というハイ・ステイクスな選抜評価制度の存在が、学習の転換を妨げてきた面があった。しかし、公立の中高一貫校がいちはやく思考力・判断力・表現力を問う選抜方法を実施したり、高校と大学をいかに接続するかという議論の中で、大学入試センター試験の廃止と新試験の導入が宣言されたりしたことで、現場における授業改善・改革への機運は少しずつ高まってきている。

ところが、実際の国語科授業では、授業改善の試みは必ずしもうまくいっていない。学習課題が大きく、成果が十分に得られないままに学習を終えるケースや、パフォーマンス課題という名の下、単元の終盤において突如仮想の現実における課題の解決を求め、それが学習内容やプロセスから見たときにどのような意味を持つのか理解できないまま、その場での解決に学習者が腐心するケースがしばしば見られる。

そうした中で、新大学入試実施に向けた期限が迫り、モデル的な試験問題が提示され、プレテストが行われた。国語科においては、二つの文章を比べて読みとるという問題解決的なプロセスを内包した問題や、想定された対話の主体になり代わって思考判断する記述式の問題の事例が示された。一時的に「ゴール」が明確となったことで、今後学校現場と受験産業において、そうした問題への対策は進むであろう。しかし、そのことは、教育改革の課題に対する解決とはならない。

では、こうした問題の学術的な課題の核心は、どこにあるのか。

一つは、現実的な状況における文章の読解過程に沿った読解モデルが十分ではないということである。これまでの文章理解の枠組みでは、読解は文章に示された言語的な情報の処理ととらえられてきた。しかし、活用力を問う読解学習においては、学習者の持つ既存知識のみならず現実世界から多くの情報を取り込み、それをテキストの情報と関係づけ、単なる情報から現実的かつ新たな知識へと組み替えて産出する必要がある。多くの教師は、そうしたプロセスをとらえる枠組みを持たないまま、課題のみを提示することになる。

二つ目に、複雑化した読解プロセスすなわち思考・認識のプロセスを評価する枠組みの欠如である。明示的な情報を中心とした理解においては、読解の評価は、該当箇所を抜き出すことがどれだけできたかというクローズドなものとなる場合が多い。しかし、テキスト外の読み手の知識や外部世界からの情報と結びつける場合は、それらとテキストの言語情報やテキスト世界とを、因果関係や相関、類似、象徴など抽象的な関係によって相互に関連させる、その関係認識について評価する必要が生じる。これは、思考のプロセスを評価する形成的評価の問題である。現実的な授業過程に沿った評価の枠組みや方法が検討される必要がある。

三つ目に、国際的な教育プログラムや海外に目を向けると、高次の能力を評価するシステムを構築し、義務教育修了資格試験や大学入学資格試験として実現している国があるが、そこでは、日々の授業においてどのような形成的評価が行われているのかということが十分明らかにされていないという問題がある。国際バカロレアのディプロマ・プログラムの修了資格試験やイギリスの義務教育修了資格試験(GCSE)について、総括的な評価としての資格試験のシステムについては、その評価方法が報告されてきているが、授業過程における形成的な評価方法の解明は十分ではなく、これらのよいところを我が国の国語科の教育方法の改善に取り入れることができていない。

2. 研究の目的

本研究につながる一連の研究では、中学校・高等学校国語科における高次読解力について読解モデルを提示するとともに、診断的評価を行う評価問題および評価モデルを開発し、生徒への実態調査および実験的な授業を行ってきた。こうした経過と上述した状況をふまえ、本申請における研究の目的を次のような課題を解決することに置く。

3. 研究の方法

1) 現実的な状況に沿った読解モデルを再構築し、授業における思考・認識のプロセスを評価する形成的評価モデルへと展開するとともに、国内において、形成的評価モデルを元にした実験的な授業を行い、その有効性を検証するとともに、問題について検討を行う。

2) 国内で国際バカロレアを導入している高校において、継続的な授業観察及び教師へのインタビュー調査を行い、授業における形成的評価のあり方と、背後にある読解と評価のモデルの分析を行う。

3) イギリスにおいて授業観察および教師へのインタビュー調査を行い、授業における形成的評価のあり方と、背後にある読解と評価のモデルの分析を行う。

4) 我が国の高等学校、国際バカロレア、イギリスでの授業について比較分析を行い、授業において批判的な読解力・表現力を形成的に評価するための評価モデルの改善を行う。

しかし、現地調査を行う初年次の終わりには、新型コロナウイルスの感染が、国内および世界において広がったため、2年次、3年次と現地を訪問しての授業観察は、計画したとおりに行うことはできなかった。そこで、次のような研究の方法をとることにした。

- 1) 国内調査
- 2) 海外の文献調査
- 3) オンラインでの授業観察の可能性の追求

4. 研究成果

初年次には、授業分析を中心とした次のような研究に取り組んだ。

一つ目に、アメリカのシカゴ大学実験学校の高等学校部において、「English II」の授業観察を行った。ジメルを取り上げた授業で、1) 分析の観点の教授、2) 短いテキストを使った実演および練習、3) テキストの広い範囲を対象にした分析、4) 結果の発表と共有、評価という授業過程で、明示的な指導、ペアワークによる言語活動といった現在の我が国の目指すアクティヴ・ラーニングのモデルが見出された。また、形成的評価も十分に行われていた。

二つ目には、ドイツのライプツィヒ大学において、中学校国語科(ドイツ語)におけるゲーテ「ファウスト」を取り上げた授業の授業分析を行う場面に参加した。文学の解釈において、クラスというゲマインシャフトにいる個人が、どのようにゲゼルシャフトと関わりながら解釈を構築するかという過程について分析を行った。

三つ目に、国内において、国際バカロレアのミドル・イヤー・プログラムの「竹取物語」を扱った国語の授業を観察した。学習者自身が、テキストを読み、要約し、物語に対する個人のものの見方の違い、多様性について、教師がファシリテーターとなって自主的・対話的な学習を行っていた。三つの授業研究を通して、アクティヴ・ラーニングにおける学習課題および意図する身につけるべき能力の違いや、協働的な過程における形成的評価の共通性をとらえることができた。

2020年度は、新型コロナウイルスの感染が国内のみならず世界的に拡大したことにより、計画していた国内と海外の学校での授業観察がほとんどできなかった。そのため、一部の国内の中学校で実地を行った他、前年度(2019年度)に行った共同研究の調査データの再解釈を行うとともに、海外に関しては文献による調査を行った。

まず授業の実地調査に関しては、広島県内の1B校で授業観察および教師へのインタビューを行った。概念型カリキュラムに基づいた母語教育において扱う概念の実際およびそれらに基づいた授業づくりのプロセスについてデータを得て、現在分析を行っているところである。前年度行った共同研究は、高等学校における文学作品に関する批評文の学習指導をテーマとしたものである。広島県内の高等学校における年間を通した実践の記録を対象に行った。批評文のモデル学習により批評の方法および批評文の書き方を学び、批評文を書くという一連のプロセスにおいて行った、学習同士の相互評価と教師による評価について分析を行い、学会で口頭発表を行った。

海外における文献調査は、Brenton Goff がオハイオ州立大学に提出した博士論文「The Process of Change in the Teaching and Learning of Writing about Literature in an 11th grade Honors English Language Arts Classroom」を対象とした。アメリカの高等学校の文学の授業における批評文の指導の克明な記録に基づいた研究で、どのような枠組みに基づいて一年間の文学の授業が行われ、そのプロセスにおいてどのような評価を行うかを読みとることができた。

2021年度も、COVID-19のパンデミックにより、現地を訪問しての授業観察は、行うことができなかった。そこで、研究の目的は保持しつつ、研究の計画と方法を変更し、次のことに取り組んだ。文学テキストの読みの授業を対象とすることにした。

海外については、文献調査に切り替えた。アメリカにおける詳細な授業過程の分析をテーマとする研究(Goff; 2018)を対象とした。一人の教師による文学テキストを取り上げた単元において、作品(グレート・ギャツビー)のみならず、歴史的な背景(アメリカン・ドリーム)に関する資料を読み、単元のはじめに書いた文章と終末に書いた批評文について、論証性の観点からルーブリックによる評価を行っていた。

国内については、近隣の高校において、授業観察および教師へのインタビューを行った。1年次で作成した批評文を教材にして、3年次において別の作品に関する批評文を作成する授業を行い、長期に渡る変化をふまえた評価を行っていた。国内の国際バカロレア校での授業観察は、

新たに行うことはできなかった。

一方で、オンラインによる授業研究の可能性を探るため、複数台のビデオカメラによる映像および複数のマイクロフォンからの音声を状況に応じて切り替えながら、パソコンに取り込み、オンライン会議ソフトを通じて配信するシステムの構築を行い、附属学校において試行した。音声の映像の配信は十分な質を得られたが、音声の明瞭さに課題が大きいことが判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 1255
2. 論文標題 論理を観点とした文学作品の読みの授業の検討 「海の命」の場合	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 63
2. 論文標題 「言葉による見方・考え方」の学びを実現する国語科学習指導の課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 141-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 1243
2. 論文標題 「他者」を観点とした「ごんぎつね」授業実践の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 578
2. 論文標題 「考えの形成」のプロセスを重視した「書くこと」の指導	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 登城千加・間瀬茂夫	4. 巻 1
2. 論文標題 高等学校国語科における文章読解のつまずきに関する研究 文章読解のモデルに基づく調査結果の分析を とあして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 27
2. 論文標題 説明的文章の読解指導における「論理」に関する学力像の更新 中学校・高校段階を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育論叢	6. 最初と最後の頁 172-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 50
2. 論文標題 「論理」に関する知識と学力観の更新を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学附属中・高等学校国語科研究紀要	6. 最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 間瀬茂夫	4. 巻 1231
2. 論文標題 説明的文章の読み方の枠組みとプロセス 第三学年「ありの行列」の授業分析を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 登城千加、間瀬茂夫
2. 発表標題 生徒の学習特性に応じた評論文の読解方略指導の課題
3. 学会等名 第140回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻尚実・間瀬茂夫
2. 発表標題 高等学校における「批評する力」を育成する文学作品の学習指導に関する研究 批評文集を用いた「読みの観点」と「書き方」の習得・活用
3. 学会等名 第139回全国大学国語教育学会秋季大会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 間瀬茂夫
2. 発表標題 公開講座「学習者の論理」をどのように育てるのか 国語科学習領域をまたぐユーザーのための「論理」の学習指導
3. 学会等名 第139回全国大学国語教育学会秋季大会（オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 間瀬茂夫
2. 発表標題 批評文（Literary Argumentative Writing）指導の構想
3. 学会等名 第13回中国・北九州国語教育学研究会（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 間瀬茂夫・富安慎吾
2. 発表標題 リーディングスキルテストと学力調査の相関からとらえた読解力に関する研究
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会仙台大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shigeo Mase
2. 発表標題 Tradition and Innovation in Japanese Language Education
3. 学会等名 The 21st Seoul National University Korean Language Education Research Institute International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村栄哉, 高橋龍之介, 間瀬茂夫, 三好美織
2. 発表標題 科学に対する認識の形成に向けた指導方略の検討-理科と国語の教科等横断的視点から-
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 甲斐雄一郎、間瀬茂夫他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 239
3. 書名 中学校国語科教育	

1. 著者名 草原和博・吉田成章・間瀬茂夫他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 174
3. 書名 ポスト・コロナの学校教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------